

天使たちの課外活動11

星と大地の芸能祭

茅田砂胡

Sunako Kayata

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 鈴木理華

天使たちの課外活動11

星と大地の芸能祭

エルヴァリータ・マリス・ドガール●ライジャ・ストーク・サリザンの母

ダレスティーヤ・クレイス・ドルガン●ライジャ・ストーク・サリザンの父

ジルダ・アルヴィン・ドルガン●ヴィルジニエ僧院の大師

ディオルク・ボリス・ドルガン●メルボルト僧院の大師

マテオ・ハルミン●惑星トゥルーク唯一の宇宙港パーヴァル国際宇宙港の宇宙港長

レオン・ヴォルフ●百年に一人の天才と言われるヴァイオリニスト

ジャスミン・クーア●元クーア財閥二代目総帥、複雑な事情から四十年間眠りっぱなしだった 一部で女王と呼ばれる

ケリー・クーア●元クーア財閥三代目総帥、複雑な都合から若返っている 一部で海賊と呼ばれる

ダイアナ・イレヴンス●《パラス・アテナ》の感応頭脳

ジェームス・マクスウェル●ケリー・クーアとジャスミン・クーアの孫だが当人はそれを知らない ヴェルナル校の中等部生

ダン・マクスウェル●ジェームス・マクスウェルの父親 《ピグマリオンⅡ》の船長

ランドルフ・カーター●通称ランディ ヴァンツァー・ファロットとともにアウローラ役アウレーリオ役を好演 元有名子役

ビアンカ・ローリンソン●ホーマー大学生、数少ないヴァンツァーの女友達

登場人物

リィ (エディ/ヴィッキー/王妃) ●アイクライン校の中学二年生 かなり複雑な理由で、一流の戦士の腕と魂を持っている

シェラ・ファロット ●アイクライン校中学二年生 とても複雑な理由で暗殺技術は超一流

ルーファス・ラヴィー (ルーファ/ルウ) ●サフノスク大学構造学科所属 実は宇宙創造にかかわる人外生命体

ライジャ・ストーク・サリザン ●惑星トゥルークの僧侶 ルウの友人

レティシア・ファロット (レティー/レット) ●チェーサー高校二年生、セム大学医学部にも所属 ものすごく複雑な理由で元暗殺者一族の最優秀暗殺者

ヴァンツァー・ファロット ●プライツィヒ高校二年A組所属 相当複雑な事情で、元凄腕の暗殺者

ハンス・スタンセン ●課外活動の一環でライジャに芝居参加を熱心に勧誘している

アクセル・レノン ●ハンスの先輩でライジャと同じキャンベル大の学生

ジョン・チャンピオン ●通称チャンプ ものすごく前向きで何事にも熱心なセム大生

アドレイヤ・サリース・ゴオラン ●ライジャ・ストーク・サリザンの師

アレフ・サーナン・ドルガン ●メルボルト僧院きっての弦の名手にして楽聖

テッド・クロムウェル●ヴェルナール大の三年生 宇宙科学館の運営責任者

アリス・エイムズ●ヴェルナール大の三年生 宇宙科学館の運営責任者

ジョージ●ヴェルナール大生 宇宙科学館の運営スタッフ

ノエル●ヴェルナール大生 宇宙科学館の運営スタッフ

モーガン●ヴェルナール大生 宇宙科学館の運営スタッフ

マルク●ヴェルナール大生 宇宙科学館の運営スタッフ

ボブ●ヴェルナール大生 宇宙科学館の運営スタッフ

ジミー●ヴェルナール大生 宇宙科学館の運営スタッフ

◎舞台『^{オーロラ}極光城の魔法使い』キャラクター

アウローラ●囚われの姫君

アウレーリオ●流浪の騎士、アウローラを助け出すと決意

1

ライジャに自分たちの舞台への出演を断られても、ハンス・スタンセンはまだ諦めていなかった。

ハンスは友人たちとともに、病院や施設を慰問に訪れる課外活動を行っている。

慰問にもいろいろな種類があるが、ハンスたちが主にやっているのは演劇だった。普段はお年寄りや子どもたちが楽しめる一般的な芝居を演じている。

慰問先で喜んでもらえるのはもちろん嬉しいし、やりがいも感じられる。だが、団員の中には演劇を専攻している大学生もいる。

それで今度の課外活動芸能祭では、普段はあまりできない独創的な演目に挑戦することになった。

皆で意見を出し合った結果、大まかな主題だけは

決まったのだが、後がなかなか進まない。

「神父とか修道女の衣裳を借りるのはどう？」

「ちよつと弱いんじゃないか」

「ありきたりだし、説得力に欠けるよ」

「だからつてなあ……」

「この際、一度、神父服で試してみようよ」

「そうだな。イメージだけでも掴まないと……」

仲間たちとそんな話をしながら歩いていた時だ。

ハンスは『奇跡のような』知人に遭遇した。

彼——ライジャ・ストーク・サリザンとは大学も違えば寮も違う。以前ちよつと顔を合わせたことがある程度だったので、脳裏に浮かばなかったのだが、思わず声が出た。

「そうだ！ 彼だよ！」

細身ながら鍛え上げられた長身に腰までの白髪。

灰色の眼は不思議と金属的な銀色の輝きを放ち、むき出しの浅黒い腕や顔に刻まれている複雑な刺青。

粗末な衣と素足に草履履きという質素な姿ながら、

一目でわかる凛とした佇まい。

頭の先から足の先まで非の打ち所がない。

まさに『うってつけ』だった。

一緒にいた仲間たちも眼の色を変えた。

その場でさっそく出演を頼んだが、感触はあまり芳しくなかった。しかし『舞台に立つてくれ』と言われて尻込みするのは、演劇をやったことのない人にはよくあることだ。口説き落とそうとしたが、そこに連絡が入ったので、ひとまず説得を中断し、目的地に急いだ。

もちろん、一度断られたからといって引き下がるつもりはなかったが、本当にただの知人で連絡先も知らないの、まずは共通の知人を頼った。

「サリザンの連絡先？」

問われたアクセル・レノンは驚いたらしい。

ハンスとアクセルは中学も高校も学年も違うが、同じフォンダム寮で五年を過ごした仲だ。

アクセルは最終学年にフォンダム寮の寮長を務め、

その後を継ぐ形でハンスが次の寮長になった。

そうした関係で、今でも親交がある。

さらに、アクセルは、学部こそ違うがライジャと同じキャンベル大の学生で、同じタウンゼント寮の寮生である。伝としては申し分ない。

だが、サリザンの連絡先を教えてくれと言われたアクセルは困惑した様子で問い返してきた。

「そもそも、彼は携帯端末を持っているのか？」

ハンスは脱力した。

「大学生だぞ。持っていないわけがないだろう」

「その常識はサリザンには通用しない。少なくとも、彼は彼が端末を触っているのを見たことはない」

きっぱりと言われてしまう。

とはいえ、アクセルも面倒見のいい男だ。

後輩の頼みを無下にするのも悪いと思ったのか、曖昧な口調で言ってきた。

「まあ、ひとまず、訊いてみる」

アクセルはその日の夜にハンスに連絡をくれたが、

またしても困惑顔だった。

「サリザンに何を頼んだんだ？」

「ぼくたちの課外活動に協力してくれて。今度の芸能祭で、ぼくたちは出場枠を確保しているんだが、重要な配役がまだ一人、決まっていらないんだ。彼はイメージぴったりなんだよ」

「——どういう役なんだ？」

「新興宗教の教祖かな。——今のところは」

アクセルは驚いたらしい。

「無茶を言うな。彼は本職の僧侶だぞ」

「アクセル。難しく考えなくてくれ。これはただの芝居なんだよ」

「なるほどな。それでわかった」

アクセルは言つて、説明を続けた。

「まず、彼は意外にも携帯端末を持っていた。当然、きみに教える以前に、ぼくに連絡先を教えてくれと頼んだんだが、『何のために？』と問い返された。ほとんど毎日寮で顔を合わせているのに、連絡先を

知る必要があるのかと言うんだな。薄情なようだが、その点は一理ある。そこで、きみに連絡先を教えてやってほしいと頼んだんだが、またしても『何のために？』だ。彼が言うには、きみの頼み事なら既に断つていると。故に、あらためて連絡を取る必要はないはず、とのことだった」

ハンスは呆れて声を上げた。

「そこで完結されても困るんだよ」

「困ると言われても、こちらも困る」

アクセルも譲らない。

「彼は厳しい戒律を守って暮らしている。その彼が一度断つた以上、変節させるのは難しいぞ」

「そう簡単に諦められたら苦労はしないよ」

ハンスも粘った。

「彼を見た友人たちがすっかり舞い上がってるんだ。ぼくも同意見だよ。彼しか考えられない。それともサリザンの戒律には『芝居に出演してはならない』という項目も入ってるのか？」

「いや、そこまでは聞いていないが……」

「とにかく、あの外見を放っておく手はないんだ。とりあえず、彼をイメージした代役を立てて稽古を進めるつもりだ。最後の手段としてその『代役』にそのまま舞台に立つてもらうことも考えているが、あの雰囲気はそう簡単に真似できるものじゃない。彼本人に出てもらうのが最善なんだよ」

「彼をイメージした代役？」

「そうだよ。似たような体格の役者を選んで、肌を褐色かつしよくに塗って、白髪かみしろの髪をかぶせて、顔と腕しやうでくにある刺青を描いて、あの装束を着せれば……」

「ハンス。それはだめだ」

思いがけず強い口調でアクセルは言った。

「サリザンの装束はファッションなんかじゃない。トゥルークの僧侶としての身分を示すものなんだ。彼の宗教に干渉することになりかねないぞ」

ハンスは逆に小さく吹き出した。

「大げさだよ。そこまで大きな問題になるか？」

「实例を聞いたことがある。作品名は忘れたが——
何かの映画撮影の逸話だ」

アクセルは慎重な口調で続けた。

「辺境の惑星が舞台の映画で、トゥルークと同様、その国では僧侶が人々の尊敬の対象だった。僧侶はみんな紫の袈裟けさを着る決まりで、それが身分証明になっている。映画の中で、主人公が僧侶に変装する件くだりがあつて、当然、紫の袈裟を着なきゃいけない。制作担当者は、撮影用に袈裟を貸してくれと現地の人に頼んだ。たかが服一枚と担当者は気軽に考えていたわけだが、現地の僧院から、それはできないと断固として拒絶された。僧侶ではない人間に、紫の袈裟を着せることはできないというんだ。担当者は驚いて、これは単なる撮影で、架空の物語なんだと説明したが、どうしても紫の袈裟を纏まといたいなら、その役者を本当に出家させて、本物の僧侶になつてもらうしかないと言われてしまった」

「……厳しいな」

「何も現地で借りなくても、似たような紫の生地で袈裟を仕立てることもできたはずだが、今の話からわかるように、撮影であつても『僧侶でない人間が紫の袈裟を着る』ことは、その土地の人々にとつて容認しがたいことなんだ。制作担当者はここで撮影を続ける必要がある以上、地元の反感を買うのは得策ではないと判断した。苦肉の策として、主人公に青い袈裟を着せることで、現地の人々にも納得してもらつたさうだ」

「覚えず唸つたハンスだつた。

「……そこまでするのか？」

「そのくらいデリケートな問題なんだ」

「アクセルは断言した。

「サリザンのあの衣裳も刺青も、少なからず宗教的意味合いを含んでいるはずだ。それをトゥルークの僧侶以外の人間が真似たとなると……一つ間違えば国際問題に発展しかねないぞ」

「ハンスは何とも言えない顔になつた。

「脅かさないでくれよ」

しかし、前任の寮長は真顔で首を振る。

「ぼくは事実を述べている。とにかく、サリザンの装束を無断で役者に着せるなんてことはやめてくれ。キャンベル大学の名譽にも関わってくることだ」

「——わかつた。許可はとる。ただ、そのためにも彼と連絡を取りたいんだよ」

ハンスは疑わしそうに言ってきた。

「残念だが……、今の話をサリザンの耳に入れたら、ますますきみとの連絡は拒否すると思うぞ」

「そんなに難しく考えないでほしいんだ。芸能祭は楽しいお祭りなんだから」

「ぼくはわかつてる。しかし、サリザンがそれを理解してくれるかどうか……」

「アクセルは不安そうな口調で提案してきた。

「彼と連絡を取る手段としては、タウンセント寮に連絡を入れて呼び出してもらうのが確実だが……」

「そうか！」

携帯端末が当たり前になりすぎて、その古典的な手段を忘れていた。その手があったと喜んだものの、アクセルは無情に告げたのだ。

「彼はきみの依頼を既に断っているんだろう？ 今連絡しても間違いなく『その件ならお断りした』と言われて終わりになるぞ」

「……何とかならないかな？」

「ぼくに言えるのは無理強いは禁物だということだ。——さりげなく訊いてみる」

「頼むよ」

一縷いちろの望みを託したわけだが、後日アクセルからもらった連絡では、感触は芳しくなかった。

ライジャに確認すると、ハンスの頼み事はやはり『終わったこと』であるらしい。

そう説明して、アクセルは続けた。

「救いがあるとすれば、サリザンの戒律に『演劇に参加してはならない』という禁止項目はないそうだ。それは確認したよ」

「だったら、ぼくの頼みを断ったのは何でだ？」

「役柄やくがらだ。どうやら『新興宗教の教祖』という点がまずいらしい。彼の戒律は嘘うそを禁じている。いくら芝居でも『嘘の身分を名乗る』ことはできないと。だとしたら、承知させるのは難しいぞ」

ハンスは頭を抱えてしまった。

しかし、諦めるつもりは毛頭なかった。

あんな逸材いっさいをみすみす見逃すなど、できるわけがない。今は別の役者を代役に稽古を進めているが、ライジャに比べたら存在感が違いすぎる。

それはライジャに会った仲間たちも痛感している。「あれを見ちゃうと、普通の神父服や司教服じゃあ、全然もの足らないよ」

「何とかお願いできないかな？」

「出番や台詞せりふは極力減らすようにする。最悪の場合、黙って立っ歩いてくれるだけでいいんだ」

三人とも完全に異国の僧侶に魅了うつつされてしまつて、『頼むからどうか口説うつついてくれ』と熱心に訴えて

くる始末だ。

だからといって、あまりしつこく迫って、相手の心証を害したのでは本末転倒である。

近いうちに、あらためて話を聞いてもらう機会をつくろうと思いつながら、今日のハンスはセム大学の大学祭を訪れていた。

ハンスはアクシオン・ロッドもやる。

一年生にしてシンクレア大学の代表にも選ばれた実力者だ。

そして、このセム大もロッドの強豪校なのだ。

シンクレア大学とは地区が違うので直近の対戦はないのだが、両者とも全国大会の常連校である。

抽選次第では対戦することになる。

少し気が早いけど、個人的な視察に来たのだ。

広い大学なので、敷地内に入っても、体育館までかなり時間がかかった。間に合わないかと焦ったが、到着した時、ちょうど一つ前のプログラムが終わるところだったので、ほっとした。

二階にぐるりと見学席が設けられている体育館は

かなりの人が入っていた。ハンスもその中に紛れ、何とか中央の床を見下ろすところに落ち着いた時、突如として体育館に音楽が鳴り響いた。

ハンスはちよつと驚いた。

会場を間違えたかと思ったのだ。

舞踏かバトントワリングでも始まるかのような、賑やかな音楽である。

奥から五人が進み出てきた。

紛れもなく長いロッドを握っているが、試合用の道着とは程遠い華やかな衣装を纏っている。

ハンスは再び面食らった。

ロッドの試合は一对一で行われるものだからだ。

呆気にとられるハンスの前で、その五人は音楽に合わせて、素早くロッドを振り始めた。

やつとわかった。これは公開競技だ。

高校生の大会ではまず行われないので、馴染みがなかったのである。

主に大きな大会の締めくくりに観客を楽しませるために行われるのは知っていたが、衣装までこんなふうに変更してくるとは思わなかった。

模範試合でないのは残念だったが、ハンスはすぐ意識を切り替えて、演技に注目した。

『型』といえども、慣れた者が見れば、実力は充分押し量れる。

五人が寸分違わぬ同じ動きをすることもあれば、二対二で実戦さながらの勢いで打ち合う中、最後の一人が回転しながら通り抜けたりもする。

一つ間違えば仲間の身体を直撃しかねない速さだ。ここまで見事に動きが揃うということは、よほど『型』を練習しているのだろう。

自分にはできないことだとハンスは素直に認め、彼らの実力に感心した。

音楽がやみ、五人が一礼して下がると、観客から大きな拍手が起こった。無論、ハンスも惜しみない拍手を送った。次は二人が出てきて対戦になったが、

これも明らかに実戦とは違う動きだ。

ゆったりした足取りで大きく移動したり、通常の試合では使えない大技を披露したり、身体の動きや技の出来映えを見せるための演技のようだった。

次は一人だけ登場し、再び大きな拍手が起こる。ハンスはその選手を知っていた。

ジョン・チャンピオン。昨年、一年で大学代表に選ばれ、全国大会で三位に入った実力者だ。

彼もまた華やかな衣装を纏っていた。金髪碧眼の長身に加えて男前なので、実に映える。

一人だけの公開競技は五人の群舞とはまた違った緊張感があった。

公開競技なので、実際の試合における勝負強さや勘の鋭さなどは残念ながらわからないが、ロッドを握っての身のこなし、眼にも止まらぬ速さで次々に繰り出される技の切れや鋭さを見れば、実際に立ち合っても手強い相手なのは疑いようがない。

強い選手に出会うと、ハンスはいつも、自分なら

この相手をどう攻略するかと考える。

同時にいつも『規格外』の後輩を思い出すのだ。

ハンスもロッドにはそれなりに自信がある。

五歳も年下の相手であれば、普通なら、問題なく

あしらえる。あくまでも『普通なら』だが。

あの後輩は普通とはかけ離れていた。

ハンスは手も足も出なかった。

恐らく現役のロッド世界王者でも、あの後輩には

太刀打ちできない。

そのくらい次元そのものが違っている。

チャンピオンの演技が終わると、館内から大きな

拍手が湧き起こった。放送が流れる。

「次は新体操部の演技です。床を交換しますので、

しばらくお待ちください」

見ていると、体育館の床がゆつくりと沈んでいき、

先程とは違う反発性のある床が迫り上がってくる。

用途に応じて床の素材を変えられるのは便利だ。

ハンスは新体操にはあまり興味きょうみがなかったのだ

体育館を出ようとしたが、大勢の人が行き交うので、外へ出るのに、かなり手間取った。

大学祭もそろそろ終わりに近づいている。

何気なく周囲に眼をやった視線の先に、ハンスは

信じられないものを見て、歩調を速めた。

私服に着替えて体育館を出たチャンプは、友人を見かけて笑顔で近づいた。

「見てくれたのか？」

レティシアも笑顔で応えた。

「かっこよかったぜ、チャンプ」

金銀天使のような少年たちも素直に感心している。

「ああいうロッドは初めて見た」

「格闘技というより、舞踏のようでしたね」

すると、横にいたライジャが言った。

「わたしの国にも武舞ぶまがある。他を倒すのではなく、

己おのれの心身を鍛えるものだ」

チャンプが笑って頷うなずいた。

「まさに公開競技の真髓だ。敵は己自身！」

「敵という表現は適切ではないと思う」

ライジヤは控えめに言った。

「わたしの感覚では自らとの対話に近い」

ライが首を傾げている。

「ライジヤの国ではそれでいいかもしれないけど、

普通ロッドは対戦形式だろう。勝ち負けがないなら、公開競技をする意味は何なのかな？」

チャンプは楽しげに笑った。

「なかなか深いところを突いてくるな」

「チャンプは対戦もやるの？」

「むしろそっちが主だ。公開競技は一種の趣味だな。

俺はどっちも好きなんだが、対戦を避ける人もいる。

公開競技を教わった先生がまさにそれで、かなりの

実力者なんだ。技の切れも身体の動きも申し分ない。

対戦でも間違いなく上位を狙えるはずなのに、なぜ

やらないのかと聞いてみたことがある。そうしたら、

ロッドは好きだし、身体を動かすのも上達したとい

う手応えを感じるのも楽しい。ただ、人を攻撃するのはいやなんだそうだ」

「そうなの？」

ライは眼を丸くした。

「武器を握って、人を攻撃したくないっていうのも、どうかと思うけど……」

ライジヤが首を振った。

「その人にとっては武器ではないのだろう。心身を鍛える道具として手に取っているのだと思う」

チャンプが頷いた。

「そのとおりだ」

「武術とは元来、実戦において敵を殺傷するための

格闘術だ。平和な世界では無用の長物となる。だが、

人を殺傷する技術であっても、長年の鍛錬を要する

優れた技であることには違いない。故に目的を変え、

運動として発展したのだろうか、実戦であった頃の

名残として勝敗を決するのだろうか。武舞はそれとは

まったく別の鍛錬だ」

ライジャの言葉に、チャンプが頷いた。

「勝ち負けがないからこそ、上達の度合いは自分で判断するしかない。しかし、自己評価は当てにならない。だから他人に見てもらおうんだ」

ライジャが言った。

「優れた演技は、よい手本になる。あなたの演技に刺激されて、この武術を始めたいと考える幼い子が、きつといることだろう」

「だったら嬉しいな」

チャンプは屈託なく笑い、あらためてライジャに向かつて尋ねた。

「武舞の経験年数はどのくらいなんだ？」

「およそ十六年だろうか」

「熟練者だな。共和宇宙には独自に発展した武術が数え切れないくらいある。今度ぜひ、きみの武舞の妙技を見せてもらいたい」

トウルークの僧侶は控えめに言った。

「わたしごときの技倆では妙技などとは恐れ多い。

それよりも……」

ライジャの視線を受けて、金と黒の天使は慌てて首を振った。

「ああいうのは無理だよ」

「そうだよ。やったことがないんだから……」

口調とは裏腹に、二人とも内心、冷や汗を掻いている。何しろこのジョン・チャンピオンという男はレティシアでさえ引き気味になるほどの熱血漢だ。

あの熱量で、ぐいぐい迫ってこられたら、非常に厄介なことになる。

見かねたシエラが助け船を出した。

「ですけど、ライジャはこの人たちがロッドを使うところを見たことがありますか？」

トウルークの僧侶は少し驚いたようだった。

「見なくともわかる。あなたも相当使うはずだ」

助け船のつもりが被弾して、シエラは急いで首を振った。

「とんでもない。わたしなどはお二人の……」

足元にも及びません——と言いかけて、これではやぶ蛇へびになると気づいて口をつぐむ。

しかし、ライジャの、まったく無自覚で無邪気むじやきで、えぐ、くらいに鋭い矛先ぼよさきは次の標的に向かったのだ。

「あなたはお二人に匹敵ひつてきする技倆なのだろう？」

視線を向けられたレティシアが内心（げっ！）と悲鳴をあげたのが、見ていてもわかった。

（こつちを巻き込むなつて！）

案の定、チャンプは眼を輝かせている。

さらにはヴァンツァーが、自分だけは被害から免まぬれるべく、素早くこの言葉に乗った。

「確かに。王妃と五角にやれたのはこの男だけだ」

レティシアが恨うらめしげに元同僚を見る。

「おまえね……」

「事実だろう」

すまして答えるヴァンツァーを思惑通り無視して、チャンプは勢いよくレティシアに迫ったのである。

「レットはロッドをやるのか!？」

「勘違いすんなよ。やらねえよ」

苦い顔で否定したレティシアだった。

正しくは、やろうとしても無駄むだなのだ。

殺傷術と運動スポルトの違いは規則ルールがあるか否いなかであり、規則など守っていても殺傷術にならないのである。

そこへ新たな人物が割り込んできた。

「サリザン！ ヴイツキー！」

名前を呼ばれた二人は予想外の人の姿に驚いたが、それ以上にチャンプが眼を見張った。

記憶を辿たどる顔になり、少し考えて問いかける。

「——アルサチアンのスタンセン？」

ハンスは驚いて振り返った。今まで、チャンプの存在にまったく気がついていなかったからだ。

彼は非常に人目を惹ひく容姿なのだ。

型破りの後輩と、知人の僧侶の姿しか眼に入っていなかったのである。

チャンプがリイに尋ねた。

「知り合いか？」

「元寮長だよ。チャンプは？」

「実際に会うのは初めてだが、高校時代に何度か、彼の試合を見たことがある」

説明して、チャンプはハンスに確認した。

「きみはセム大生——じゃないよな？」

それなら部活で顔を合わせているはずだから、とチャンプは続け、ハンスも頷いた。

「今はシンクレア大学だよ」

チャンプは笑顔になった。

「次は全国大会で会えるかな」

「もちろん、そのつもりだ」

全国三位の選手が自分を知っていたという事実、ハンスは密かに誇らしさを感じていたが、今はそれ以上に重要な問題がある。

異国の僧侶に話しかけた。

「サリザン。こんなところで会ったのも何かの縁だ。頼む。話を聞いてくれないか」

必死の様に、ライジャはむしろ困惑顔だった。

「前回のお話なら、既にお断りしたはずだが……」

ハンスは声を張り上げそうになったのを、何とか堪えて訴えた。

「——わかつている。無理は承知でお願いしている。こちらの一方的な希望で、きみには何のメリットもないことも重々承知だ。だから、ぼくに何かできることがあるなら何でも言ってくれ」

ライジャは驚いたようだった。

「あなたに何も望むつもりはない。わたしの戒律の問題なのだ」

「アクセルに聞いた。だけど、その戒律には演劇に出演してはならないという項目はないだろうか？」

「確かにない。しかし、そういう問題ではない」

見かねたリイが間に入った。

「込み入った話なら、場所を変えたら？」

「だよな。んじゃ、俺はこれで」

これ幸いと逃げだそうとしたレティシアだったが、残念ながらそううまくはいかなかった。

チャンプが明るく話しかけたのだ。

「レット。今度ぜひ手合わせしよう」

「えっ？」

ハンスが思わず声を発した。

驚きと疑問の語調だった。

実はハンスはレティシアの『実力』を知っている
数少ない人間の一人である。

短い声の中にも、レティシアがロッドをやること、
かなりの実力であること、さらにはそれを極力ひけ
らかさないでいることを承知しているからこそその、
(彼のチャンプのような実力者にロッドをやっていることを話
したのか?)

という心の声が丸聞こえの「えっ？」だったのだ。
当然、チャンプはハンスに尋ねたのである。

「彼は強いのか？」

それはもう——と太鼓判たいこばんを押しかけて、ハンスは
一応、本人に確認した。

「——言ってもいいのかな？」

レティシアとしては苦笑いするしかない。

「さつき、その坊さんにばらされちまったんだよ」

ライジャリチャが律儀りちぎに頭を下げる。

「意に沿わないことをしたのなら謝罪する。内密に
されているとは知らなかったのだ」

今度はチャンプが不思議そうな顔になる。

「どうして秘密にするんだ？」

ハンスは肩かたを竦すくめて答えた。

「彼と実際に試合してみればわかるよ。いい経験に
なると思う。——自信喪失にも陥おちいるけどね」

チャンプは軽く眼を見張り、疑問の口調で言った。
「俺は一応、全国三位の選手だぞ？」

「学生大会の三位だろう？ 共和宇宙や辺境宙域を
合わせた世界王者でも、この子たちには勝てないよ。
はつきり言って異次元なんだ」

「この子たち？」

ハンスの視線を追って、チャンプに見つめられた
リイはとりなすように言ったものだ。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。